

「責任の再配分」が世界経済発展に大きく寄与

世界銀行は、2000年1月、スイスのダボスで開催された世界経済フォーラムでCSRとコーポレートガバナンスを専門とする部署の設立を発表した。これによって、わが「ビジネス・競争力・開発」チームが世銀の教育・研究機関である世界銀行研究所(WBI)内に誕生した。以来、チームはアカウンタビリティ、企業倫理、ガバナンス、透明性や中小企業のためのCSR等をテーマに数々のプログラムを実施している。ペンシルベニア大学ウォートン・ビジネススクールとハーバード大学ロースクールとの協働で開発したウェブ上のCSR研修プログラムには、これまでに世界90カ国から約3万人が参加している。

CSR潮流の源は先進国にあるものの、最近では途上国の企業も積極的に取り組んでいる。例えば、セメント製造で世界第3位を誇るメキシコのセメックス社は、世界的な競争力の維持には次世代のリーダーとなる若者の教育が重要であるとの認識に基づき、国立モンテレー大学とわがチームとの共同で、CSRの教育プログラムを実施した。後にこのプログラムはメキシコ競争力研究所(IMCO)とメキシコ最大のビジネス団体であるCOPARMEXの支援を得て、ラテンアメリカ全域に広げられた。

セメックス社は、啓蒙だけではなくCSRの実践にも力を入れている。マイクロクレジット(小口信用貸付)の手法を住宅に応用し、融資としてセメントを提供し、低所得者が連帯責任で住宅の増・改築に従事するユニークなプログラムを考案した。このプログラムは貧困層の住宅改善に大きな貢献をもたらすと同時に、セメックス社のブランドと販売促進に大いに役立っている。

ブラジルの砂糖生産者協会は、米国、欧州連合への砂糖生産補助金削減を求める世界貿易機関(WTO)の決定後、労働、環境問題を中心とするCSRへの取り組みにより競争力を増し、激化する市場競争に対応しようとしている。アルゼンチンでも国の基幹産業であるアグリビジネスを対象とするCSR研修プログラムが開始された。02年、経済危機により社会的混乱が生じたアルゼンチンでは、市場、社会の安定のために、政府に一任せず、企業も積極的に貧困対策に取り組む必要がある。そこで、食品産業と市民団体がパートナーシップを組み、棚卸商品を安全性確認の検査後、貧しい人々に供給する「在庫食料供給プログラム」を始めている。

ロシアでも企業にアカウンタビリティと透明性を求める動きが活発となり、ロシア商工会議所やロシア産業連合、ビジネス・ロシア、バイカル・ビジネス／インターナショナル・マネジメントといった団体が中心となり、数多くのCSR研修活動が行われている。

こういった開発途上にある国々でのCSRは、先進諸国とは異なる特徴を持つ。先進国のCSRは各企業が自主的に独自の経営に組み込むものと考えられている。ブランド価値や社会の信頼感を増すための手段のひとつと位置づけられることが多く、企業存続に不可欠な競争力への戦略の要素としてとらえられることは少ない。一方、途上国では、CSRは市場経済を育成するための重要な役割を

担っている。企業は、十分に整備されていない法的、経済的諸事項を補い、国家の重要政策課題である「競争力」を実質面で強化するためにCSRに取り組むのである。

このような経済発展途上国でのCSRの取り組みは、「責任の再配分」というCSRの新たな考え方を示唆している。めまぐるしく変化する世界情勢と悪化する地球規模の問題により、誰の責任か、その所在が不明な領域が増大している。これまで政府の責任と見なされていたものの、手がつけられずに放置されている課題に民間企業が率先して取り組み、新たなビジネスチャンスを生み出すのか、それとも政府のみに任せてじっと待つのか、現代の企業に課された挑戦といえる。

「責任の再配分」という考え方は、政府、民間、市民団体というセクター間の壁を越えたパートナーシップを生み出す。それぞれの強みを生かしたパートナーシップが開発問題、ひいては世界経済発展に大きく寄与する。

拡大と深化を続けるグローバリゼーションが経済的發展を促進する一方で、同時に負の側面を持つことがNGOや一般市民を含めて広く認識され、そのひとつの表れである開発問題への十分な対応なしには、健全なる経済發展は成しえないという認識が世界的に強まっている。

UCC上島珈琲が中南米のコーヒー生産に貢献したとして「コーヒーの花功労賞」、東芝はグローバル企業が中国において実施するCSR活動を評する「公明公益賞」、トヨタ自動車はインドの環境NGOが主催する「デリ持続可能な開発サミット」でリーダーシップ賞を受賞するなど、途上国、経済移行国の發展に努力する日本企業の前向きな姿勢が見られる。しかし世界が直面する問題は膨大で、より多くの企業の協力が求められている。わがチームはCSRを通じて先進国と途上国の橋渡しをしている。日本企業と協力し、企業と開発問題の双方に有益なプログラムが実現することを期待している。

ジョージア・ペトコスキー

世界銀行研究所(WBI)

「ビジネス・競争力・開発」チーム責任者

1992年、世銀に入行以来、CSR、コーポレートガバナンス、民営化とリストラ、チェンジ・マネジメントの専門家としてロシア、東ヨーロッパ、アジア、ラテンアメリカ、アフリカ等で数多くのプロジェクトに携わる。経済学ならびに電子工学で博士号取得。ハーバード、マサチューセッツ工科大学のフルブライト客員教授を歴任し、共著を含め15冊の著書、120以上の研究論文、記事を発表している。

